

コンクリートのふる舞い

3. 法隆寺に想う技と心

地濃 茂雄

矢田丘陵を背にした松並木の参道・築地堀・静かにたたずむ塔……。

ここ法隆寺に足を運び、壮麗な伽藍のたたずまいの中に身を投じたとき、不思議と清新な想いが込み上げてきます。それは法隆寺伽藍の木造建築が飛鳥時代の建築様式をいまに伝えた最古の遺産ということのほか、それを乗り越えた精神とか情念とかを感じさせられるからです。

目の当たりにする千四百年を経た驚異の木造建築は、日本の歴史の流れの中で、幾度か修理の手が加えられ、新しい活力を賦活されて現在に至っています。

素材を永遠に残すことの永遠性の美学を西洋の石の文化に見つけることができるとすれば、その石というものが比較的永遠性に近い素材であるのに対して、木はいかに手入れをしても朽ち果てていく素材です。だとすれば、滅びるからこそ修理し、持続させる精神風土の思想が、ここ法隆寺伽藍の木造建築に見い出せます。それは石の文化ときわだったもので、俗に仏教文化による持続性の美学と呼べるものかも知れません。

それは、何百年に一度かの屋根瓦の葺き替え、組物や桁、柱の組直し、これらによって法隆寺の寿命は今日まで延ばされてきました。まさしく木造建築の想像を絶した生命力といえるでしょう。



千四百年を経た法隆寺

つまり、ヒノキという卓越した建築用材が我が国にあったからだけのことでなく、古代日本人の想像以上に優れた技術、知識、知恵もあったからでしょう。

古材を丹念にほぐし、再びそれを組み立てていく宮大工の古材に対する限りなく深い愛情も忘れてはならないことでしょう。それは木に生き、木のいのちを知った工人の技と心で、息づく法隆寺の表情に鮮やかに浮き上がっているからです。

その仕掛人の一人ともいべき宮大工・西岡常一棟梁は、何百年に一度しか巡り来ない法隆寺の解体修理に巡り遭え、氏の著書の中で「木を買わず山を買え」とその体験を記述しています。

それは、建築用材の一つとして木をみるのではなく、山の中で雨風の中で呼吸してきた生命ある木を、木の心にじかに触れ、木の性質を木の育った場所で見分けて、自然のいのちをそのままに生かして使えと諭しています。

氏はまた「棟梁たる者は人の心を組むことが大事、心を組んではじめて木組というものができると」説いています。

ひらたくいえば、木のいのちを損なわず十分発揮させ得る木造りをし、寸法で組まず、木の性質と人の心で組めということを指しているのでしょう。

法隆寺が千四百年も生き続けてきた根源は、遠くは飛鳥の工匠から受け継がれてきた技と心にあるようです。

転じて今日のコンクリートにおいて、経済成長の中での工期短縮・効率化・乱造等々で構築された構造物の維持管理が求められています。つまりコンクリートの診断・再生、耐震補強などの技術が課題の一つです。

こうした事情からすると、法隆寺は今後重要な意味を持つものと思います。それはとりもなおさず飛鳥の工匠の技と心です。

こんな想いを新たにして法隆寺伽藍をあとにしたとき、斑鳩の里はずでに闇へと化していました。

(写真も筆者)

[工学博士・新潟工科大学教授、当センター理事]